

「ひとは何のために生きているのか」という問いに 答えて：ひとつの哲学入門

荒木, 正見
九州大学大学院医学研究院：非常勤講師 | 地域健康文化化学研究所：理事長

<https://doi.org/10.15017/26559>

出版情報：地域健康文化学論輯. 7, pp.1-12, 2012-09-30. 地域健康文化学会
バージョン：
権利関係：

「ひとは何のために生きているのか」という問いに答えて

—ひとつの哲学入門—

荒木 正見

この論文は、論文らしからぬ体裁で、哲学入門を企図して「人間の存在意義」を考察する試みである。論文らしからぬ、というのは、小学生でも興味を持てるような読み物の体裁をとっているからである。先行研究を検討評価したり、引用箇所を丁寧に表記したり、二重否定を酷使して論理的厚みを増したり、などといった常識的な論文作成の技法をなるべく避けて、できるだけ単純に、一見読み物でもあるかのように進行する。しかしもちろんそこには考え続けなければ理解できない流れだけは確保するし、参考文献については著者に敬意を表し、もっと研究したい方のために情報を提示する。また、哲学入門と謳いながら、近隣の心理学の業績を多く利用した。特にエリクソンの人格発達論についてはかなりの紙幅を割いた。これは、今日、教育や医療の分野を中心に広く利用されている考え方であるという理由と同時に、読者が自らを省みる上で分かりやすい目安を提供する意図による。

そして、テーマは表題のように「ひとは何のために生きているのか」という問いに答える形で進行する。

このような手法については、多くの哲学者の皆様方からは邪道とお叱りを受けるであろう。たしかに学問の主な目標は、誰一人思いつかない事柄を提起したり誰一人気付かなかった論理的展開を示したりするところにあることはいうまでもない。このことが、学問の主要な役割である、想定外における解答を準備するという、危機管理上の価値を意味している。ところで反面、学問は万人に開かれなければ、後継者が育たないというジレンマもある。また特に哲学に関して言えば、自らの命を絶つ若者の若年化傾向が目立つことに対して、分かりやすい言葉で真正面から生きることの価値について答えなければならないという面もある。

当然ながら、このような生き方探しに対して貢献すべき書籍も綿々と存在してきた。

例えば、近年では、企業人や公務員経験から哲学を志した著者による『超訳「哲学用語」事典』（小川仁志著、PHP 文庫、2011年／2012年）や『超解「哲学名著」事典』（小川仁志著、PHP 文庫、2013年）は一般人にも分かりやすく解説された哲学入門書である。その意味では一般人が座右に置くのにふさわしいと言える。

ところが、研究者の立場からいえば、このようにすっきりと定義されると、さきに述べた論理的冒険が失われ危機管理的な役割が希薄になるような危惧を感じる。もちろんこのことで、当の著作の目的による執筆手段を否定するわけにはいかない。その価値を認めたくえで、ややぜいたくな希望を感じると言った方が良い。

このような論理的冒険と、哲学用語の難解さ解説とを併せ持って、考え続けることから離れずに現実の諸現象を解説しつつ哲学の諸問題と取り組んだ最近の入門書としては、藤田正勝『哲学のヒント』（岩波新書、2013年）が挙げられる。先の両書に比べれば、何かをすっきり規定するというよりは、ひとつひとつ先人の知恵を借りなが

ら考えていくという姿勢なので、すぐに定義を求めるひとよりは、自分の周囲をじっくりと見つめつつ考えるひとにふさわしいといえる。

さて、上記のいわば両極的な入門書と比して、これから述べていく自身の哲学入門は、さきに言及したように「生きることを考える。」という側面を強く持つこととする。その意味では平坦かつ満遍なき哲学入門とは少し異なることを冒頭からお詫び申し上げたい。と同時に筆者自身の努力目標として、執筆を進めるにつれ、できるだけ普遍的な哲学入門に近付けてみたい。

多くのひとは、おそらく少年期に一度は「ひとは何のために生きているのか」という問いに悩んだのではないだろうか。そして、いかにも単純な問いなのに、よく考えるととても難しい問いだとしばらく棚上げし、いつのまにか大人になったのではないだろうか。

いま、その難しさの正体を考えれば、ひとつひとつの言葉にすでに難しさが隠れていることに気付く。

「ひと」とは何か。

「何のために」とはどのような意味なのか。

「生きる」とはどういうことなのか。

まず、この三点を軸にその難しさから考え始めたい。

1. 三つの難しさ

1. 「ひと」とは何か。

「ひと」は肉体なのだろうか。

確かに外科手術などの場合には、一個の肉体として横たわっている。しかし、多くの場合、われわれは「ひと」として成長しさまざまな活動をしている。このような活動の中心が「ひと」と呼ばれ、「人格」と呼ばれる。

その「人格」は現在、人格は多様な側面の統合体であると定義され、その考え方を人格説と名づける。

この、人間を「人格」と捉え、人格は多様な側面の統合体である。という人格説を示したのがストローソン(P.F.Strawson 1919-2006)である。

P.F.Strawson, *Individuals, An Essay in Descriptive Metaphysics* (Methuen, 1959/71)、中村秀吉訳『個体と主語』(みすず書房、1978年)によれば、「人格」を正確に記述しようとする、と「人格」を主語として無限の述語を記述しなければならない。それらの述語はすべて「人格」の側面を意味するのである。

この考察は、本来、統合的な人格において心身は、統合的な人格の諸側面でしかない、ということと、それぞれの側面はそれぞれに現実的である、ということの意味しているといえる。すなわち、ひとつの人格はたしかにある人格という主語を持つが、その範囲は主語を焦点として無限の広がりを持つ。

例えば医療従事者や教育者にとって、このことは自分自身の問題であるとともに、対象としての患者や学生・生徒の問題であるから問題が深刻になる。治療や教育とい

う対人的な特に複雑な行為自体は、個々の専門性に委ねることになるが、その専門性を発揮する場には、また、無限の広がりを持つ対象者がいるのである。

このように「ひと」は人格として無限の広がりを持ち、それゆえにさまざまな活動が可能になり、それゆえにこそ、表記の問いが生まれ、人格を磨くことが重要な課題となるのである。

2. 「何のために」とはどのような意味なのか。

表記の問いに悩むとき、多くの場合に、この「何のために」にすでにひとつの前提を与えているから難しくなるのではないだろうか。

その前提とは、「何かを達成するために」といった目的を想定するものであったり、さらに言えば、人は何かの道具として価値があるのではないかと想定するものであったりする。

例えば、世の中の役に立つ人にならねばならない、ということはみずから役に立つ道具にする考え方である。

後述するようにこの考え方は重要であるが考えようによっては危険性を孕んでいる。

何かの道具という時には具体的な分かりやすい目的があり、その目的を完璧に実行することが求められる。そこには完全モデルが設定され、その完全モデルに至らないものは価値が低いとされる。いうまでもなく、これを人間に適用すればさまざまな差別が生まれる。後で述べるが、そのような差別は人間にとってとても危険な考え方である。

人間はこのような具体的な目標を持った道具なのだろうか。それとも。

少なくとも、ここで問う「何のために」は、ただ単にひとを分かりやすい道具として考える発想ではないといわなければならない。ひとはひととして平等である、とはよく言われることである。その理由は、ひとを分かりやすい道具としてのみ考えるのではないということと関係があることに気付かねばならない。そうしておいて、もう少し考えてから、この「何のために」を考えるが、価値の問題を考える倫理学における結論だけを前もって言えば、「ひとは道具として価値があるのではなく、存在することに価値がある」のである。それは決して安易なことではなく、そこにはすべての答えが詰まっているはずである。

3. 「生きる」とはどういうことなのか。

普通「生きる」といえば、心臓が動いている間のことを指す。医療では少しでもこの心臓が動き続ける時間をあとに延ばすことを、当面の第一の目的として努力する。たしかにそうなのだが、そうでもないような気もする。例えば、「亡くなった方が心の中で生きている。」という言い方がある。単なる比喻といえそうなのだが、ただの思い出といいきれないダイナミズムを感じることもある。例えば、過去の小説家の作品に感動するような場合である。その小説家がなんらの意味で「生きて」いるからこそ、われわれに感動という力を与えるのではないだろうか。

このように考えれば、どうも、医学的、物質的に心臓が動いていることだけを「生きる」と読んでいてのではないことに気付く。ではわれわれはどのように生きているのだろうか。また、生きていくのだろうか。

そして以上の三つの難しさは相互に絡み合った問題である。
それらを少しずつ考えていく。

2. あるということ。

哲学とはすべての物事の根本を考える学問だということはしばしば語られる。では、すべての物事の根本とはなんだろうか。

それは、「あるということ」である。

歴史的には哲学の起源は、ソクラテスの言葉「無知の知」にあるとされる。プラトンが記した「ソクラテスの弁明」（手近に読めるものは、プラトン／久保勉訳『ソクラテスの弁明・クリトン』岩波文庫、1964年）によれば、ソクラテスは優れているとされる人々を訪れ議論したが、すべてたしかに優れてはいるものの、絶対的な知からすれば自らが無知であることを知らない。それに比べてソクラテス自身は自分が無知であることを知っている。それゆえ、ソクラテス自身のほうが優れている。というように「無知の知」こそが、最も重要な知であるとされるのであるが、このことが歴史的には哲学の起源であるとされる。

さて、この無知の知を自覚するに及ぶ、知るべき事柄の究極が「あるということ」である。すなわち、すべての事柄、すべての知識の根底に常に横たわっているのは、それらが「ある」という事実である。

知識の究極としての哲学は、この「あるということ」を課題としている。

3. ふたつの主語

「あるということ」を考える場合に、「あるもの」すなわち「○○がある。」という時の「○○が」という主語は、個別的なものである。「山がある。」「愛がある。」「人がいる。」と表現すれば、当面そこにはそれら個々の姿が浮かぶ。

しかし、さらにその主語を説明しようとする、先的人格説でも述べられたように、無限の述語が可能になる。このことから、個々の主語は実は無限の述語によって支えられていることが分かる。

そして、そのような無限の述語が成立している世界は、無限の、従って、唯一の存在だということが分かる。

さらに、この唯一無限の存在は、世界そのもの、宇宙そのものであり、分割した他の存在は無いのだから、真に絶対的な存在だといえる。

この、唯一、絶対、無限な存在は、キリスト教では神と呼ばれ、西田幾多郎では「場所」と呼ばれるなど、それぞれの哲学者や思想家がそれぞれの表現で呼んできた究極的基盤的な存在である。

さて、われわれが個々の事柄を主語にして何かを語っていると、自覚していようとまいとそれと裏腹に、必ず唯一絶対無限な存在そのものについて語っていることになる。

そして、唯一絶対無限な存在そのものを主語にすれば、個々のすべての主語が、すなわちすべての事柄が、その唯一絶対無限な主語に所属していることになる。

「あるということ」を、主語を手がかりに考えれば、このようにふたつの主語によって成り立っていることが理解される。

4. ひとがあるということ

以上のことを受けて、ここで「ひとがあるということ」とはどのように考えられるであろうか。

繰り返すことになるが、人格説では個人は無限の述語を持つことができる。象徴的な表現場面では「Aさんは石である。」とさえいえる。同時に、唯一絶対無限の存在を主語にすれば、個人はそれに所属しているが、ここに時間概念を入れると新しい事実が見えてくる。

個人だけを主語にしている場合には、個人の死はいわば医療における死の規定と一致し、心臓が止まればそこで個人は終わったかのように見える。しかし、唯一絶対無限な存在が主語になれば、それは時間的にも無限なので個人は永遠に保存され続ける。例え生物としての死が訪れても個の存在は唯一絶対無限な存在の、永遠の時間の中に生きた軌跡として保存され続ける。それは他の人の記憶となったり、生きていた時の業績となったり、写真となったり、さまざまな姿で保存されている。例えそのような分かりやすい姿でなくても、一団体が誕生しただけで、唯一絶対無限な存在に変化を与えるのであるから、その変化の軌跡は唯一絶対無限な存在において保存され続けるのである。

このように考えれば、ひとがある、ということは「永遠の人格としてあること」と言えることになる。

5. 発達する人格

このような「永遠の人格としてあること」という考え方に着いた心理学者に E.H. エリクソン (E.H.Erikson 1902-1994) がいる。今日、エリクソンの人格発達論は、医療系の基礎知識として重視されているが、それは以下の発達論的テーゼが現実的な治療や人格観察に有効であると同時に、最後の老年期の課題として示される背後に、

この「永遠の人格としてあること」が横たわっているからに他ならない。このような理由で、哲学入門を企図したこの論文ながら近隣の学問に少し足を踏み入れたい。

E.H.エリクソンの人格発達論については E.H.Erikson, *The Life Cycle Completed* (Norton, 1982/1998)、村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル、その完結』（みすず書房、1989年/1999年）、岡堂哲雄ほか『患者ケアの臨床心理 一人間発達学的アプローチ』（医学書院、1978）、前田重治『図説 臨床精神分析学』（誠信書房、1985年）などを基にして概略する。

まずその人格発達論の基本的な柱は以下の通りである。

- ① 人格は生涯を通して発達する。その発達過程はいわば「予定表(ground plan)」のように決まっています、これを「ライフサイクル(life cycle)」と名づける。
- ② ライフサイクルは8段階の心理・社会的発達段階に分けられ、発達は段階を追って進行するが、発達の各段階では得られるべき課題があり、それは各段階において対立的要因の統合として獲得される。それが解決されなければ危機として現れるが、その危機を克服することで、その時期特有の心理的能力を獲得する。

=漸成原理(epigenetic principle)。

- ③ ある段階で得られるべき課題が得られなかったら、それは危機的課題としてその後の人生に持ち越される。=危機説

そして、その段階を示す人格発達図式=生活周期は、以下のように示される。特に老年期において得るべき英知の内容の背後に「永遠の人格としてあること」が横たわっていることに着目すべきである。

表：エリクソンの生活周期(人格発達図式)

前田重治『図説 臨床精神分析学』（誠信書房、1985年、113頁）の表を、（E.H.Erikson, *The Life Cycle Completed*, Norton, 1982/1998, p 56-57, Chart 2 = 訳語はほぼ、村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル、その完結』（みすず書房、1989年/1999年）に従う。）によって補う。また、[]の獲得すべき課題については、岡堂哲雄ほか『患者ケアの臨床心理 一人間発達学的アプローチ』（医学書院、1978年）を利用して改変した。最終項は、特に筆者が補記。

発達段階	対人関係	危機の両極と得るべき心理・社会的バランス	① ふさわしい心の成長課題 ② 危機的な状態
① 乳児期 (~1歳)	母性	信頼感⇔不信感 基本的信頼 対 基本的不信 [希望]	① 自己と世界に対する信頼性。 他人を信頼する力。希望を持つ力。 ② 孤立。自己否定。依存。 自分の周囲に興味や関心を持たず引きこもる。自分も他人も社会や環境も信用できない。何につけてもすぐに否定し、もしくは、全て依存し、自分ではなにもしない。
② 早期幼児期 (1~2歳)	母性・父性	自律性⇔恥・疑惑 自律性 対 恥, 疑惑	① 自律性。自主管理能力。 ② 欲求や衝動を抑えきれない。

			[意志]	規則を破る。自分の枠や価値観や考え方に頑固にこだわる。無恥。
③	幼児期 (2～6歳)	家族・友人	積極性⇔罪悪感 自主性 対 罪悪感 [目的]	① 社会性。第三者に配慮する力。 ② 自己中心的。わがまま。 競争心や支配欲求が強い。自己の好みだけで行動し集団本来の目的を見失う。
④	学童期 (6～12歳)	教師・友人	生産性⇔劣等感 勤勉 対 劣等感 [適格]	① 協調性・耐性。 集団内で協調し自分の役割をこなす力。生産する喜び。自分なりのレベル意識。 ② 集団内で協調できない。 人の評価ばかり気にする。心身のバランスを崩してまで物事にこだわるか、逆にこつこつ努力を重ねることが出来ない。
⑤	青年期 (12～20歳)	父・母 教師・友人	自我同一性⇔同一性拡散 同一性 対 同一性混乱 [忠誠]	① 自己責任能力。自立性。 責任を持ち首尾一貫した行動を取る力。 ② 行動に首尾一貫性がない。 自分の言動に責任を持たず、行動が散漫で思いつき過剰。将来像を描けない。
⑥	成人前期 (20歳代)	配偶者 友人	親密さ⇔孤立 親密 対 孤立 [愛]	① 自他の尊重。 相手の意見を受容でき、相互に大切に して支えあうことができる。 ② 他人との距離が不安定。 配偶者や友人との間で相互に認め合い 自立し合った関係が持てない。
⑦	成人期 (30歳代)	配偶者・ 友人・子	生産性⇔沈滞 生殖性 対 停滞 [世話]	① 真の養育と生産。 人や仕事をそれぞれに合った姿で豊かに育てる ことができる。相互に養育し合 って全人的信頼関係が形成できる。 愛情や関心を持って相手を育み信頼 関係を形成する能力。相手の成長を信頼 し、良いところを認めて伸ばすこと ができる。人生のテーマを発展的に追 求できる。 ② 養育能力の欠如。 子供、友人、患者、部下、同僚、配偶

				者、仕事のテーマなどを対象の本質に沿って発展させることができない。対象を自分の思い通りにしたがる。
⑧	老年期	人類	統合性⇔絶望 統合 対 絶望, 嫌悪 [英知]	① 永遠の生命と人生の肯定。 人生と人生で出会ったすべての人と事柄を受容する。人生全体におけるミスや挫折の意味を見出し成長の糧として肯定的に受容できる。人生で出会ったすべての事柄とその受容について、子孫に伝えることができる。自分の人生でやり遂げてきたテーマを語るができる。 ② 自分の人生を否定し、絶望する。 周囲と人生を恨む。

6. 生存に向かって発達する存在そのもの

さて、このように発達するのは、人格に限らない。唯一絶対無限な存在のものこそが、絶え間ない発達を遂げているのである。複雑に絶え間ない変化こそがその証拠である。

では、発達の目的は、といえば、それは生存に向かって、と答えるしかないであろう。なぜなら、生存を否定することが発達の目標であるなら、存在そのものはそこに存在する人格などの個々のものを発達させないであろう。少なくとも生き物は、大人へと発達することで生存力を高める。たしかにさらに進めば、すべての生き物は老化してあたかも退化するがごとき姿を見せて個体としての死を迎える。しかしそのようなライフステージを体験することがまた、個と存在そのものの豊かさでもある。このことは、多様性の問題として後述する。

ところで、無知の知ということを考えて、知ることの発達ということも考えられる。例えば、ヘーゲルの「精神現象学 (G.W.F.Hegel Werke3 “*Phänomenologie des Geistes*” Surkamp, 1970・G,W,F,ヘーゲル／長谷川宏訳『精神現象学』作品社、1998年・檜山欽四郎訳『精神現象学 上・下』平凡社ライブラリー、1997年・金子武蔵訳『ヘーゲル全集 4・5 精神の現象学 上・下』岩波書店、1971・1979)」はその意図で記されたものである。その緒論 (Einleitung) では、「現象する知の叙述が企図されなければならない。」「実在的ではない意識の諸々の形式は、展開と関係そのものの必然性によって完成する。」等と、一方では、現象知すなわち意識に立ち現れている知の叙述をしなければならぬと述べ、さらにそれは、現象知そのままではまだ実在とは言えないので、展開と関係そのものの必然性、すなわち論理的必然性によって説明した上で完全な知としなければならない、と述べている。そして、この展開の

終着点は、知のすべてが、この論文の言い方で言えば、唯一絶対無限な存在の契機であることに気付くところにあるとされる。

知る側からのこのような学問的記述は、見ての通り知られる存在そのものと裏腹である。当面読み取れるのは、知られるもの、すなわち個々の存在するものすべては、唯一絶対無限な存在に帰するものだということである。そしてそのことに至る行程が発達だということである。

ところで、ヘーゲルはこの「精神現象学」で、さまざまな系列化された事柄を段階的また論理的必然性に沿って叙述し絶対的な知の境位に到達するが、その境位を始めてから説明すれば事足りるではないかという異論も考え得る。実際には、ありとあらゆる事柄を強引とまで言えるような論理で結びつけてようやく絶対的な境位に到達するや否や、もう一度この経緯を辿りなおして知を深め、知を増すことを要求する。他方、ここを基点として、唯一絶対無限な存在を主語として、その自己展開という形で、あらゆる領域の事柄を体系的に結びつけ展開する学問の旅に出る。無知の知からいえば、有限な人間として当然の旅立ちである。

この姿勢には、多様性の豊かな存在的価値が前提的に示されている。

では、なぜ多様性は豊かで価値があるのか。

このことは生存原理と密接な関係がある。

倫理学とは価値および生存の学である。倫理的に生存の根本を考える時、論理的に矛盾しない柱になる考え方のひとつは「人類の生存」であるといえる。ここから導かれる倫理学の一般的前提の一部は以下の通りである。

「生存のためには無限で多様な知識が必要である。」

(知識による危機管理原則＋多様性の原則)：

無知に付け込まれれば、無知な集団は絶滅する。これに対して人類は情報という武器を持つ。仮にたった一人しか知らなかったことでも、それが人類を救う知恵であれば、すぐさま全人類に知らせて人類を守ることができる。

「総ての知識の位置関係、特に実行すべきか否かについての知恵が重要である。」

(生存の倫理原則)：

先のことからいえば、人類の生存にとって重要な情報のひとつに、ひとを殺す仕方についての知識がある。それを知っておかなければ、危険が迫ったことを察知できない。しかしその知識は自ら実行してはならない。実行すべき知識かそうでないかを知らることが、特に重要である。これは古来、知恵と呼ばれてきたものである。

このような倫理原則を想定すれば、ヘーゲルが、否、すべての研究者がなぜ、日夜、しかも一般人には理解できないような複雑な考察を繰り返し、日常的には分かりきっているようなことを、あれこれと複雑な論理を駆使してかき回しているかが理解できる。人類にとって想定外の危機が迫ったとき、多様な知識を駆使してそれを危機と見破り、多様な論理を検証してその対処方法をひとり知っておけば、人間の強力な武器であるコミュニケーションによってそれを広め、人間は自らを救うのである。すなわち、多様性は最後の危機管理を保障する。

このように、知識に関して言えば、発達とは生存のための絶対的知識、すなわち唯一絶対無限の存在そのものが存在すること、それが永遠に生存するように考えること

が必要不可欠であるという知識を得ることであると同時に、生存に反することは実行しないという知恵を持ちつつ、多様な知識を得ることだという総合的知識を発揮して生存のための絶対的知識を得る努力をすることである。

そして唯一絶対無限な存在そのものの発達もまた、上記の、知識の発達と連動して考えればよいのである。すなわちそれは無限な多様性への展開である。しかも、唯一絶対無限な存在そのものこそがその多様性の拠って立つ基盤だということである。

先に、道具としての価値と、存在としての価値の対比を挙げたが、いま多様性の問題としてそれを考えることも出来る。

道具としての価値を考える場合には、われわれにとって知られた目的を前提とし、その知られた目標に合致するかどうかはすぐに検証される。しかし、存在としての価値を考えれば、目標や検証はありえない。何が完成などということは分からないのである。

多様性としての在り方は、この後者と密接な関係がある。目先の目標ではない何かを求めて、それぞれの個性の赴くままに生きていくことが、無限の多様性を開くのであるが、それこそが、ひとは自覚してはいないが、唯一絶対無限な存在の豊かさを増大させていることを意味する。と同時に、先に述べたようにそれは最後の危機管理でもある。一言で言えば、ひとは、ひとと唯一絶対無限な存在と、そして言うまでもなく自分自身の生存に反することは実行しないという知恵に留意しさえすれば、あとは自分らしく生きていけばよいのである。

7. ひとは何のために生きているのか

ではこれまでの考察をもとにして、本来の問題を考えてみよう。

「ひと」は肉体だけのひとではない。唯一絶対無限な存在に、永遠に存在し続ける「人格」である。

「生きている」とは、その問いの原点は、肉体としての生命がある限りということかもしれないが、その意味で生きているのは当然だが、肉体としての生命が無くなってからも永遠に生き続けることを意味しなければならない。ここで、肉体としての生命がある期間と、それ以外の期間を比べれば、前者は限りある時間のなかで生きているのに対して、後者は無限の時間を生きている。また、前者が無ければ後者も存在しない。ということは前者の生き方は永遠の命を左右する重要な意味がある。多くの人間にとって恵まれているのは、前者の場合には、意識的に自己を認識し自己を制御し自己を発達させることが出来る。もちろん、不幸にして例えば胎児のまま肉体としての死を迎えるものも、自己を意識的に制御できなかったかもしれないが、その存在ゆえに他の意識を制御する。

前者であれ、後者であれ、総合すれば永遠に生きているその生き方は「何のため」だろうか。

すでに述べてきたことを纏めれば、それは、人類の、世界の、唯一絶対無限な存在の、従ってすべての個々の、そして自分自身の「生存のため」である。

先に、多様性は最後の危機管理を保証すると述べたが、個々の人格が多様な個々の人格として存在することが、この危機管理を保証するのである。

このように「ひとは、人類の、世界の、唯一絶対無限な存在の、従ってすべての個々の、生存のために生きている。」と言え一見自己撞着的であるが、それを、道具としての価値としてとらないで、存在としての価値、ととれば「あることに価値がある」のであるから、本来、自己目的的な課題であったと言える。それは決して虚しいことではなく、むしろ個々の存在すべての存在価値を保証する豊かなものである。

差別や暴力や戦争を本能的に嫌悪する一般の感覚は実はそれらがこのような、発達と危機管理に逆行する行為であることを潜在的に知っているからである。

8. 今後に向けて

さて、このようにたった一つの言葉から、われわれと存在すべてとそれらを統合する存在そのものの構造が生まれ、そこから発想することの豊かさが発見できたが、その内容を個々の状況に適應させることは、まさに今後の重要な課題である。この論文の要旨を理解していただければ、現実の社会でいかに対応するかがより明確になろう。

と同時に、われわれは、意識的な生ある期間を充実して生きるべきことが示された。エリクソンに拠れば、老年期の課題のひとつは、自分が生きた証を子孫に伝えること、と示されるが、そこには、恥ずかしくない生き方をしなければならない、という暗喩が含まれている。恥ずかしい生き方とは、生存に反する生き方だからである。個体としては、個体としての生を精一杯生きることこそが、生きる目的である。それが、個体として唯一絶対無限な存在を最も豊かにすることでもある。人生は楽しいことばかりではないが、苦しさや辛さも不完全もそれらすべてが、自分と存在全てにとって価値あることである。現実苦しんでいる場面ではそこまで思い至らないかもしれないが、それが自分と存在全体に価値あることだという信念をもって生き抜くことこそが我々の使命でもある。その視点からすれば救いは必ずある。

さて、今後に向けては、この論文のように抽象的な議論をした内容を、現実に向かって開いていくことが当面の目標であるとともに、この論文の考察から派生する、哲学的課題についても、また同様のスタイルで解決していかねばならない。

一例としては、コミュニケーションの問題がある。たった一人の知識が人類を救うとしてもその知識を伝えるための技術を持たねばならない。それは歴史上では、論理学として展開されてきた。

また、危機を危機と認識することが出来る感受性を訓練するにはどのようにすればよいのか、ということも重要な課題である。個々の存在がそのまま価値があるだけに、それらの存在にとっての問題意識の気付きは人類の生存を左右する。特に、「生存の倫理原則」として述べた、生存に反する行為とはどのように考えればよいのか。

このようなもろもろの問題に展開する基本的な考え方を提供したが、むしろそこを出発点としてわれわれは生きている。この論文自身の個性を磨くためにもさらに考察すべき課題は無限である。

以降、少しずつさらなる考察を記録していきたい。

参照・引用文献

小川仁志『超訳「哲学用語」事典』PHP文庫、2011年／2012年

小川仁志『超解「哲学名著」事典』PHP文庫、2013年

藤田正勝『哲学のヒント』岩波新書、2013年

P.F.Strawson, *Individuals, An Essay in Descriptive Metaphysics* (Methuen, 1959/71)

P.F.ストローソン／中村秀吉訳『個体と主語』（みすず書房、1978年）

プラトン／久保勉訳『ソクラテスの弁明・クリトン』岩波文庫、1964年

E.H.Erikson, *The Life Cycle Completed*, Norton, 1982/1998, p 56-57、Chart 2

村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル、その完結』みすず書房、1989年/1999年

岡堂哲雄ほか『患者ケアの臨床心理 一人間発達学的アプローチ』医学書院、1978年

前田重治『図説 臨床精神分析学』誠信書房、1985年

G.W.F.Hegel Werke3 “*Phänomenologie des Geistes*” Surkamp, 1970

G,W,F,ヘーゲル／長谷川宏訳『精神現象学』作品社、1998年

檜山欽四郎訳『精神現象学 上・下』平凡社ライブラリー、1997年

金子武蔵訳『ヘーゲル全集 4・5 精神の現象学 上・下』岩波書店、1971年・1979年

※本誌刊行の遅れに伴い最新の資料を補っている。

[In answer to the question “Why human being is living” –An introduction to philosophy–]

[ARAKI, Masami・地域健康文化学研究所理事長・九州大学大学院医学研究院非常勤講師・哲学、比較思想]